

本人が物語風に綴る闘病記

44歳で甲状腺がんと中咽頭がんが見つかりましたが、
中2の娘が「大したことないやん」と言うので。

著：原利彦（1972年生まれ）



甲状腺がん 発覚編 000：大半は忘れたふりをして生きていこう。

ハーブル・トキは44歳の映像職人です。

2017年3月に『がん』という悪性腫瘍が甲状腺と、その1か月後に中咽頭（扁桃腺）に見つかり、一生、闘わなければならなくなりました。状態は、ステージ4、余命半年からの始まりでした。

トキは、まだまだ働き盛りです。そして、**トモという妻と、ウタという14歳の娘がいます。**

しかし、治療の副作用で、いつも、誰かに首を思いっきり絞められているかのような感覚があり、また、口の中がカラカラに乾くので水を手放すことも出来ません。食べることも、眠ることも、ままならないのです。もう、大好きな歌も歌えません、お祭も楽しめなくなりました。それでも、生きてゆかなければなりません。

そこで、トキは、こう考えました。

『人生の大半は、がんのことを忘れたふりをして生きていこう』



『もう、僕は、トモにとって今までの夫ではない』

『もう、僕は、ウタにとって今までのお父さんではない』

だが、

『せめて、トモにとって、カッコいい夫でいたい』

『せめて、ウタにとって、カッコいいお父さんでいたい』

これは、そんな、ハーブル・トキの2つ目の人生のお話、土に還る日までの物語です。

⇒ 001：痛くも痒くもないけど。